

家庭での問題行動が目立つ発達障害傾向と診断された女兒への睡眠問題に対する介入

睡眠問題を行動という側面で捉えることの児童発達支援事業所での意義

枝松 慎次郎

社会福祉法人木犀会 ケアステーションコナン

KEY WORDS: 児童発達支援、ABA(応用行動分析)、睡眠問題

(問題と目的)

未就学児とその家族を対象に支援を担う福祉サービスの一つに「児童発達支援事業」がある。近年、個人の問題を治療・解決するという意味合いの強い「療育」という表現から、個人の問題・障害の軽減に留まらず広く地域や家庭での暮らしや育ちを支援していこうとする「発達支援」という表現を使っていこうという動きが広まってきており、「家族支援は乳幼児期の発達支援の要」と述べられるなど、児童本人への支援だけでなくその家族・家庭への支援の重要性が提唱されるようになってきた(全国発達支援協議会2014)。発達障害を持つ子供が家庭で示す問題の一つに睡眠の問題がある。発達障害を持つ子供は定型発達の子供よりも高い割合で睡眠問題を示すことが知られており、子供の睡眠問題は親の慢性的な疲労、家庭内の不和など睡眠問題を抱えている児本人だけでなくその家族が所属する家庭へも様々な問題を引き起こすことが示されている(Chavinら1980)。

そこで本稿では、発達障害傾向をもつ女兒の睡眠問題に対して行った介入の報告を行い、児童発達支援事業所などの福祉施設で睡眠などの生理的な側面が強く影響を受けると思われる問題を行動の側面から捉えることの意義について考察する。

(支援方法)

今回の発表に関しては、同意書を作成し、保護者に説明を行い、保護者の同意を得て発表を行っている。

1) 対象児童

生活年齢：5歳1ヶ月。女兒。【新版K式発達検査2001認知適応：84 言語・社会：98 全領域：91】。【CARS：27点】。【Vineland-II コミュニケーション：77、日常生活スキル：70 社会性：59 運動スキル：78 不適応行動指標：24(内在化問題：24、外在化問題：24)】。

2) 保護者のニーズ

とにかく言うことを聞いてくれない。他の兄姉は素直に決まった時間に寝てくれるのにこの子は寝ないで起きている。自分や他の兄姉と同じ時間に寝て欲しい。

3) 児の行動的な特徴

保育所では大人しく一人で過ごすことが多い。保育所の方針で毎日2時間午睡を取っている。お遊戯などの集団で行うものは絶対にやらない。家では激しい行動を示し、母が注意をすると「自分は悪くない。そんなことで注意をするママのほうが悪い」と言いながら泣き叫ぶ。また、決まった時間に寝ることを嫌がり、父と共に起きているといい、24時を過ぎても起きていることもある。

4) 目標行動

母との話し合いの結果、問題を「布団に入り眠りにつく行動の形成不全」と捉え、介入1では「母と一緒に布団に入り就寝する」を、介入2では「親の決めた時間に布団に入り就寝する」という行動の形成を目標とした。

5) 介入スケジュールと強化子

介入は家庭での記録と、はなまる(以下◎)を獲得した場合の言語的賞賛(強化子)を使って行われ、それ以外は普段どおりに生活をしてもらった。最初の1週間を「ベースライン(以下BL)期」とし、それ以後を介入期とした。介入期は介入1と介入2に分けられた。介入1を3日ほど続けたところで「仕事の都合で一緒に寝ることができない、目標を変えたい」との相談を母から受けたため「親の決めた時間に布団に入り、就寝する」ことを目標にした介入2を設定した。また、一週間ごとに行われる個別セッションでは記録を見ながら本児と母と筆者とで振り返りを行った。

6) 記録方法

記録は記録用プリントを用意し、翌日の朝、母が本児と共に以下のルールに従って記録をつけた。BLと介入1では、母と共に布団に入り眠りについた場合に「◎」、母と共に布団には入れたが、その後布団から出てしまった場合には「○」、布団に入れなかった場合には「×」の印を記入した。介入2では、決められた時間に布団に入り眠りについた場合には「◎」、決められた時間に布団に入れたが、その後布団から出てしまった場合には「○」、決められた時間に布団に入れなかった場合には「×」を記入した。

(結果)

表1: 介入結果

ベースライン							介入1			介入2										
							親と一緒に			親が決めた時間										
1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
×	×	×	×	×	×	×	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎

介入の結果を表1に示した。BLでは全て×であったが、介入1、介入2では、全ての日で◎が記録され×は一度も記録されなかった。

(考察)

介入の結果、BLでは見られなかった目標行動が母不在時でも自発し、維持されるようになった。母からは「以前は寝るように促しても無視して布団に入ろうとしなかったが、今は自分がいなくても兄姉と共に布団に入っている。すぐに寝付けないこともあるようだが、布団から出ないでがんばっている。朝と一緒に◎をつけることも日課となって、一緒に記録をつけることを楽しみにしているようだ」との報告を受けた。言語的賞賛だけでなく母と一緒に◎をつけることが児にとっての強化子となったのだろう。◎をつける度に「せんせい、褒めてくれるのかな」と言っているといい、筆者の賞賛も強化子として機能していたと思われる。また、父も記録をつけるようになってからは児を早く寝せようとするなど協力してくれるようになったため母の負担が減ったとの報告を受けた。父の協力を引き出したことも介入成功の大きな要因となっていると思われる。

睡眠などの事柄も行動や習慣の形成不全と捉えることで投薬などの医療的な支援を取り入れにくい福祉施設でも支援を行いやすくなる。このことが睡眠などの生理的な側面が強く影響を受けると思われる問題を行動の側面から捉えることの意義だと思われる。(EDAMATU shinjirou)